商いの新しいものさし

㈱商い創造研究所
代表取締役
松本 大地

第158回

円頓寺商店街の復活劇

4年前の本連載で、名古屋にある円頓寺（えんどうじ）商店街に触れたことがある。昨年11月11日、年に一度開催される円頓寺商店街振興組合主催による「秋のパリ祭」を訪れた。パリの市のような雰囲気と食、雑貨、ファッション、エンターテインメントすべてが融合し、訪れる人の多さとともにその大きなパワーに驚いた。これほどまでに商店街が復活するとは想像していなかった。今回のテーマは「フランス旅」。「フランスを旅したい、パリを楽しみたい！円頓寺商店街でBon voyage（好い旅を）」と描かれ、名古屋市と在日フランス大使館が後援をした。

大賑わいのパリ祭イベント

フランス旅の内容は、蚤の市で出会う愛すべき小道具を指す言葉であるブロガントが揃い、アンティーク・ヴィンテージのお皿やグラス、ジュエリー、フランス焼き菓子、絵本、フランスで買い付けてきた洋服や雑貨などが所狭しと並ぶ。アコーディオンの生演奏やフランス映画のトークショーも開かれ、まるでパリの休日を楽しむような1日だった。コンセプトを遵守しているため、まるで商店街がテーマパークのような臨場感に溢れ、ここでしか得られない体験価値には遠方から訪れるリピーターも多いと関係者が話してくれた。

2022年時点の各都道府県が把握している商店街数は1万3408カ所あり、23年のショッピングセンター数3133カ所と比較するとその数は約4倍以上になる。中小企業庁が3年ごとに行う「商店街実態調査」から現状を紐解くと、全国商店街平均店舗数は51・2店であり、中型のSC並みである。業種の平均内訳は飲食店が28%、衣料品・身の回り品が15・2%、サービス店が13・7%と、年々物販店が減少するが、飲食店やサービス店が増えており、最近は医院や整骨院、学習塾といった内訳に入らない業種が目立ってきた。平均空き店舗率は13・59%となっている。

一方、1商店街あたりのチェーン店舗率は18年調査では10・1%だったのが、21年では10・6%と増加している。コンビニエンスストアや全国チェーンの食物販、飲食店などに変わっていく傾向があり、後継者不足で廃業する個店も増え続け、年々地域らしさが薄れていく現況にある。

話を円頓寺商店街に戻すと、名古屋駅から徒歩15分の名古屋で最古の歴史を持つ円頓寺商店街は、1970年代中ごろから活気を失い衰退が続いていた。2010年前後から隣接する古い民家や商屋の風情ある四間道（しけみち）と呼ばれる土蔵のある街並みとの連動や、商店主に加えて関心を持つ建築家や大学の先生なども再生に取り組んだ。昭和の古い味わいを残しながら空き店舗をリノベーションし、小資本でも出店できる若い飲食経営者を呼びこんだ。

やがて雨風を防いでくれるアーケードを活用したオープンテラス付きのレストランやカフェが増え、徐々に商店街に活気が出てきた。その後、古いアーケードの骨組みを残し、コンセプトやデザイン性を加味して新調された。新たに仲間になった飲食店と、以前から残る老舗洋食店や肉店、薬局との新旧が合わさった魅力は、まるでパリのパサージュのようだとの声が上がった。15年に関係者が渡仏し、「パッサージュ・デ・パノラマ」に出向いてプレゼンテーションの機会を得たところ、驚くことに提携が実現したのである。

世界初の百貨店は18 52年に誕生したパリの「ボン・マルシェ」であり、「パッサージュ・デ・パノラマ」は1800年につくられ、今では歴史的建造物に指定されるなど、まさに商店街業態の原点がパサージュなのである。この自ら提携を申し入れた前向きな行動力が実を結び、さらに商店街の活性化が進んだことで、全国の商店街関係者も訪れるようになった。

円頓寺商店街がコンセプトを重視し、ノスタルジックでモダンな地域の溜まり場、共感の場になったことで、観光客までが訪れる商店街に昇華した。

一方、道路を隔てた名古屋駅側には「円頓寺本町商店街」があるが、残念ながら時代対応をしなかったことで劣化が進み、2つの商店街での賑わいや繁盛店づくりなどに大きな差が出てきた。衰退した商店街であっても、やり方次第で再生はできると強く感じた「フランス旅」の1日だった。